

舟運

～松浦川の舟運利用 明治頃～

松浦川の舟運利用は、藩政時代から米や石炭などの輸送に利用されていた。松浦川本川 付近の駒鳴には集積場(石坂問屋)があり、この辺りまで航行していたと伺われる。

「井手おち」と呼ばれる甲板せきにより貯水し川船を航行していた。また「川除かわよけ」といって、村の石高に応じた川さらいの出来を賦課されていた。などの川船の航行に工夫していた記述がある。

また明治29年、河口に唐津橋(松浦橋)が架けられるまでは、松浦川河口付近には1本の橋も無く、河口から一番近い橋は、徳須恵川合流付近の「川原橋」のみであった。江戸時代から明治のはじめまで、人々は渡し船を使うか、浅瀬を徒歩で渡って松浦川を往来していた。このため、松浦川から巖木川合流点付近の間に、9つもの渡し場があった。

表 2-9 松浦川下流旧渡し場一覧

名称	区間	備考
水島の渡し	満島～城下	武士のみ利用可
新掘の渡し	満島～船宮の新掘	庶民の渡し場
大渡し	半田川河口～和多田大土井	
鬼塚渡し	久里の古賀鶴～鬼塚(鬼塚駅)	
筑前渡し	久里の土井～山本の橋本	
下双水の渡し	下双水～山本の向う鶴	
上双水の渡し	上双水～山本の新月寺下	
大野渡し	大野～三反間	
久保の渡し	久保～相知山崎	

【井手おち】

松浦川の上流では、川が浅く、急な瀬もあったので、荷物を積んだ船が通れない場所もあった。そこで、舟場の上流に「井手(堰)」を作って水を溜め、船が下るときに井手をあけて溜めておいた水を流し、その流れに乗って川を下る方法がとられていた。

分野 歴史
地域 全域

◎地図・写真・統計資料など



M44～45年頃の渡し場の状況



ウグイ(イダ)
コイ目コイ課

(唐津新聞社より)

◎引用・参考文献(出典)

◆末盧国

◎エピソード・伝承・うんちく など

松浦川上流域の黒髪山にまつわる伝説で、昔、ここに悪い大蛇が住みつき、様々な害を起こしていた。そこで、天治元年(約900年前)に鎮西八郎為朝という人物がこれを退治したということである。退治された大蛇は松浦川に流れ込み沢山の石斑魚(イダ)になって海に入り、毎年春になると遡って黒髪山に御礼詣をする。そのため松浦川本流以外の川には遡らなかったと言われる。

松浦川のことを「イダ川」と書くなど松浦川の季節的川魚で大川野近隣の名物であった。
(末盧国 編集:松浦史談会)

イダは春一番が吹く頃に川を遡ることから、大川野では、春一番のことを「イダ嵐」とも言う。河川では、上流から河口域までの広い範囲に生息している。主として淵などにすみ、単独または群で動き回るものが多い。季節的には、夏季は表層に、冬季は深みに移る。

(出典:川の生物図典,山海堂)

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話:0955-72-3467

■ホームページ:
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html